一般社団法人　津　山　青　年　会　議　所

第63代理事長　橋　本　安　弘

理 事 長 所 信

４６億年という地球の歴史と比べると
我々の人生は、瞬きをするほどの短い時間。

一瞬を生きる、私と、一瞬を生きる、あなた。
その二人が、青年会議所を通じて出会った。

この一瞬は、一瞬と一瞬が重なった、奇跡の一瞬。

すべての出会いは偶然ではなく必然である。
だから、この一瞬を大切にしたい。二度とないこの一瞬を。

【はじめに】
「初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。」
万葉集　梅花の歌

厳しい寒さのあとに春の訪れを告げ、見事に咲き誇る梅の花のように、一人ひとりの日本人が明日への希望とともにそれぞれの花を大きく咲かせることができる、そうした日本でありたいと願う。

「令和」という新たな時代の幕が開けた。

人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ。悠久の歴史と香り高き文化、四季折々の美しい自然、こうした日本の国柄を次世代へ紡いでいくために、我々が、自信と誇りに満ち、希望溢れる未来を大胆に描き、その実現へ向けて常に行動しなければならない。未来を切り拓くのは、我々青年の使命である。

【新しい時代はあなたの一歩から】
この新たな時代に、直面する様々な課題を克服し、さらには逆境を乗り越えていく。その大きなパラダイムシフトの鍵となるのが情報化社会をバージョンアップした超スマート社会Ｓｏｃｉｅｔｙ５．０の実現である。まさに今、社会が大きく変わろうとしている。ＡＩ、ＩｏＴ、ロボット、ビッグデータなどによる第４次産業革命が急速に進み、未だかつて誰も経験したことのない時代に突入した。ＡＩにより、必要な情報が必要な時に提供されるようになり、ＩｏＴですべての人とモノがつながり、知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を創出している。そして、ロボットなどの技術で、少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などの課題も克服されるだろう。世界から注目される東京２０２０オリンピック・パラリンピック競技大会は、世界にイノベーティブでポジティブな変革を促し、それらをレガシーとして未来へ継承していく。責任世代である我々は、この瞬間が日本の成長を決定づけるファクターであることを認識し、イノベーションを起こす機運を高めなければならない。我々は、次の１０年という扉の前に立ち、まさに扉を開こうと手を掛けている。可能性溢れる２０３０年という近未来、大胆に描いてみよう。そして踏み出そう。我々の目の前の一歩から、へのすべてが始まるのだから。

【青年会議所運動とは何なのか】
「我々青年は、あらゆる機会をとらえて互いに団結し、自らの修養に努めねばならぬと信ずる。」　１９４９年　東京商工青年会議所（日本青年会議所前身）　設立趣意書

先の見通すことのできない激動の時代「このままではいけない、自分たちで何とかしなければ」そう誓った三輪青年（東京商工青年会議所 初代理事長 三輪善兵衛氏）のもと「新日本の再建は我々青年の仕事である。」と同じ理想と使命感に燃えた青年が集い、日本青年会議所が誕生した。東京から始まった日本の青年会議所運動は、以来、戦後日本の民間運動の白眉といわれるほどの拡大発展をとげた。運動が全国に伝播され、１９５８年、郷土つやまでは、志高き青年３６名により、全国１３５番目の青年会議所として津山青年会議所が誕生し、弛みない努力と揺るぎない友情で固く結ばれ、輝かしい歩みを進めている。創立以来の“個人の修練、社会への奉仕、世界との友情”の三信条は、我々の永年の運動展開の中で、年を追って具体化されてきた。郷土つやまの青年運動、社会運動団体の先駆けとして、自らの修養に努める若き青年経済人が、互いに磨き合う団体として、現在も変わらぬ思想のもとに活動している。不確かな将来を少しでも確かな未来へと実感させるには、今を生きる我々が、意欲的に社会参画することから始まる。いつの時代も“明るい豊かな社会”は渇望されており、その使命を遂行できるよう情熱溢れる青年世代から修養に努めなければならない。青年会議所運動は、より良い明日に挑戦することを宿命づけられている。多様化の時代だからこそ、どのような激しい変化にも対応できる、正しい考え方を身につけた個性の確立が必要である。感性豊かな魅力ある個性が、地域、企業において発揮されれば、“明るい豊かな社会”が一歩近づく。我々は、未来の兆しを読む直観力に優れ、常に変化していく社会情勢に素早く対応し、むしろこれに先駆ける力をもっている。青年経済人として自らを磨きながら時代を変革する能動者となるために、蕉風俳諧の理念である不易と流行を意識し、自己研鑽に励み、努力を惜しまず、愚直に青年会議所運動に取り組もう。郷土つやまを少しでもより良くしたいと志を抱き、何事にも挑戦する我々が、郷土つやまの未来を創造しよう。次の１０年を創るのは確実に我々であり、人間として成熟する前の青年世代においてトレーニングに従事している我々は、この郷土つやまにとって誇り高き存在であると信じて。

「青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言う。優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言う。」

青春とは心の若さである。溢れる情熱、失敗を恐れない挑戦心、未知なるものへの好奇心、この青春という詩は、我々の若き心を奮い立たせてくれる。青年会議所運動は、まさに青春そのものである。

【愛する郷土つやまの未来を切り拓く】
我が国は、２００８年をピークに本格的な人口減少社会、超高齢社会に伴う深刻な人手不足の時代へと突入した。我々が暮らす郷土つやまにおいても、人口減少と急速な少子高齢化の進行、労働人口の減少による経済の衰退、社会保障負担の増大、税収の減少などを招き、必要な行政サービスの提供が困難になるなど、市民生活全般に大きな影響を及ぼすことが懸念されている。少子高齢化の進行による自然減と、都市部への人口流出による社会減は深刻な問題であり、人口減少に歯止めをかけるには子育て環境の整備と若い世代の流入促進・流出抑止への取り組みを積極的に実施しなければならない。核家族化と急速な高齢化の進行は、地域との関わり方を変化させ、郷土愛や人と人のつながりの希薄化を進め、地域コミュニティの維持を困難にしている。さらに、地域文化の伝承機会が減少し、地域に対する関心が失われつつある。市民一人ひとりが、郷土つやまへの愛着と誇りを育み、郷土愛の向上を図る取り組みが必要である。今後は、市民が住んでいる郷土つやまに対して愛着と誇りをもって行動すること、自分もこのまちの一員であるという認識をもって地域活動などに参画するシビックプライドの醸成が重要であり、シビックプライドのスパイラルアップがアクティブシチズンシップの確立に必要不可欠である。また、人口減少による空き家の増加は、老朽化や災害による倒壊の危険性や防犯・衛生の問題が危惧されており、利活用とともにその対策が求められている。就職や進学に伴う若年層の人口流出が進む中、働く場所の創出、雇用拡大などの雇用環境の充実、ＩＪＵターンなど定住・移住による労働力の確保が急務である。これらの課題は、自分たちの将来にどう影響するのか実感できず、危機感は芽生えにくい。問題意識をもっても、何をすれば良いか分からない。だが、そうした無責任な姿勢はもう許されない。我々が自分たちの手で郷土つやまの未来を変えていくしかない。なぜなら、我々はこの郷土つやまと運命を共にしているからである。まちを良くするということは、世のため人のための前に、自分のためにやらなければならない。まちづくりは他人事ではない。まちが無くなれば、家族も会社も守れない。だから命がけでやろう。自分のためのまちづくりが、大切な人のためのまちづくりとなり、そして郷土つやまのためのまちづくりとなるまで。

「勢衝青天攘臂躋　気穿白雲唾手征」（青空をつきさす勢いで肘をまくって登り、白雲をつきぬける気力で手に唾して進む。）
逆境に負けることなく、青天を衝くかのように高い志をもって未来を切り拓くという意味の漢詩の一節である。

志とは、未来に成し遂げるべき何かを見つめること。志を抱くとき、我々は、真にこの一瞬を生き切ることができる。愛する郷土つやまの未来に光を届けるために、この命を使っていこう。いつ、この命が終わりになるとしても、命燃え尽きる、その最後の一瞬まで。

一瞬に一生をかける時もある、一生が一瞬に思える時がある。

一瞬一生。今を生き切る。

【志高く未来へ挑む我々が、１０年後の郷土つやまを創る】

我々の暮らす郷土つやまは、黒沢山、広戸仙、那岐山へと続く美しい山並み、吉井川が東西に貫流して津山盆地を形成し、四季美しい山紫水明の地である。美作国の国府が置かれて以来、１３００年に渡り政治・経済・文化の中心として栄えてきた。慶長８年、美作国１８万６５００石を領して、森忠政公がこの地に入り津山城を築き、出雲街道の要衝として栄え、現在の郷土つやまの礎となっている。近年、郷土つやまでは、人口減少により地域社会の持続可能性についての危機意識が急速に高まる一方で、自然・歴史・文化的資源を数多く有していることから、観光資源の活用が進んでいる。これからのまちづくりは、未来を見据えて、郷土つやまに最大限の効果が期待されるハードとソフトの両面が充実したまちづくり運動を展開していきたい。郷土つやまにはこれから開花する可能性を秘めた素晴らしい価値が数多く眠っている。行政と民間、市民のそれぞれが得意分野を活かしながら連携・補完し合い、課題を一緒に解決していくためのパートナーシップのまちづくりが必要である。我々がハブとなり、連携を推進するための基盤となるプラットフォームの構築が一つの重要な方向性となる。そして、友好交流都市であるサンタフェ市・出雲市・諫早市や姉妹都市である宮古島市と相互のまちの活力創出や友好交流を深め、より一層の連携の促進も必要である。東日本大震災を契機として再生可能エネルギーの普及拡大、情報通信の高度化とグローバル化、地方分権のさらなる進展など、郷土つやまを取り巻く社会環境が大きく変化している中、我々は、郷土つやまの特性や時代の潮流の変化を的確に捉え、市民のニーズを把握しながら、目指すべき姿と進むべき道筋を明らかにするためのビジョンと戦略の実現に向けて、実践的なアクションプランを策定するべきであろう。津山青年会議所は６０周年の節目に運動の方向性となる中期ビジョン誰もが夢と誇りをもつまち“躍心するつやま”の創造６０Ｖｉｓｉｏｎを打ち出した。時勢の移り変わりの早さを踏まえて、２０１７年から４年間の取り組みの検証を行い、検証を踏まえた新ビジョンの策定を検討する。冷静に情熱的に未来を洞察し、我々の組織が描く理想の未来を明確に表現した新ビジョン策定への議論を進めよう。それにはまず、自分自身と向き合わなければならない。郷土つやまの未来を語る前に己を律することから始めよう。自分はどうあるべきか。すべての問題は自分に原因がある。この覚悟を定めることができれば、人として成長できるだけなく、運気を引き寄せ、未来を拓くことができる。自分づくりから郷土つやまのまちづくりを考えていこう。また、我々は会員減少という決して先送りできない問題を抱えている。津山青年会議所は１９９６年の１１６名をピークに会員数が年々減少している。我々の組織の目指すべき未来像を実現するためには、我々一人ひとりがこの喫緊の課題に真摯に向き合い拡大を進めるしかない。今まで以上に行動量重視の手法を用いて、会員拡大を我々の１丁目１番地の運動として実践していく。そして、失敗を恐れず、挑戦する。それが、我々の魅力だということを忘れないでほしい。新たなる旅立ちとなる２０２０年を迎えるにあたり、郷土つやまの光明たる我々が、己を律することで自らを磨き、果敢に挑む姿勢と揺るぎない信念を身に纏い、青年会議所運動を展開することが、常に時代に頼られる存在としてあり続け、郷土つやまの再興につながると確信している。青年会議所の価値観に共感し、切磋琢磨を惜しまず、郷土つやまの課題の解決に向けて挑戦する我々が、市民一人ひとりの想いが叶い、夢と希望の花が咲き誇る郷土つやまへと導いていこう。１０年後の未来を生きるすべての人のために。すべては愛する郷土つやまのために。

「もしも明日、世界が滅びようとも、私は今日、リンゴの種をまくだろう。」
この言葉は、世界がどう在るかではなく、自分がどうあるか、その覚悟の尊さを教えてくれる。

「未来は今、我々が何をするかにかかっている。」
永遠に続く、今の先に未来があるのだから。

２０２０年とその先のに種をまこう。夢と希望の花を咲かせるために。

【NO ONE LEFT BEHIND ＳＤＧｓの推進】

ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）とは、持続可能な世界を実現するための１７のゴール・１６９のターゲットから構成され、２０３０年のあるべき姿に向けた道筋を示した羅針盤である。２０２０年の我々の運動は、日本人と親和性が高いＳＤＧｓの調査研究を行い、すべての事業においてＳＤＧｓの推進に取り組んでいく。２０３０年までに誰一人取り残さない持続可能で、多様性と包摂性のある社会を実現するために、次世代の子供たちへのＳＤＧｓ推進、企業への普及・啓発活動を進めよう。我々がＳＤＧｓを推進することで、ＳＤＧｓ達成に向けた活動が行われ、企業が社会により良い影響を与えるようになることが期待される。将来的に多くのステークホルダーを巻き込み、より良い社会が築かれ、良い社会から経済成長が実現し、未来が明るい豊かなものになるだろう。我々が郷土つやまで一番ＳＤＧｓを推進する組織となり、持続可能な社会を創造する起点となる。

【２０２０年へ夢描き、そして打ち鳴らせ、新たなる鼓動】

津山青年会議所創立２０周年記念特別事業として誕生した２０２０年の森は「津山青年会議所全会員の知恵と汗でもって二十一世紀を考え指向しよう」という目標のもと、１９７７年以来、地域の発展に寄与することを目的に、不連続の連続の活動において４３年間継続して取り組んできた。２０２０年は、記念事業の実施とタイムカプセルの開封を行う。２０２０年に夢を翔け、連綿と紡いできた先達の創始の想いを遂げよう。全国城下町シンポジウムは、全国の城下町の青年たちが一堂に会し、地域（まち）の人たちとともに、地域（まち）のもつ可能性を見いだすための機会として開催されるコンベンションである。２

００４年に第２３回全国城下町シンポジウム津山大会が開催されてから１７年の時を経て、２０２１年に第４０回全国城下町シンポジウム津山大会の開催が決定している。史上最高の全国城下町シンポジウムの実現を目指し、成功に導く準備に取り組もう。

【知識と見識と胆識を兼ね備えた人財への成長】

我々は、どのような困難な状況に立たされても不可能を可能にする場面を幾度となく目の当たりにしてきた。志を高くもち、実行した者だけが得られる、かけがえのない時間がある。特に日本青年会議所、中国地区協議会、岡山ブロック協議会への出向経験は、その先の人生を大きく変えてくれる。果敢に挑戦することは、成功は約束されていないが、成長は約束されている。密度の濃い時間を体感できる出向は、地域の枠に捉われない幅広い人脈を広げることが可能であり、その輪を世界へ広げ、国内各地や世界の青年会議所会員との友情を育むことができる。これらの出向経験は、多種多様な価値観で物事を多面的な視野で捉えることのできる人財へと成長できる機会となる。また、出向で得た経験を活かすことは、自己の成長のみならず、津山青年会議所の発展に寄与することにつながる。さらに、渉外事業や各種大会での経験は、意識変革を起こし、学びと成長の機会となる。

【当事者として社会を変えられる青年経済人へ】

すでに世界にはＣＳＲ（企業の社会的責任）やＣＳＶ（共有価値の創造）という思想が広まっている。これからの企業は、社会と向き合った経済活動が必要不可欠となる。古来より日本では、近江商人の「三方よし」の精神や「道徳経済合一説」など持続可能性を重んじる文化があり、売り手の利益だけではなく、買い手や地域、社会にまで利益をもたらすビジネスこそが理想であるという考え方が高く評価されている。我々は、相反する利益追求と社会貢献をアウフヘーベン（止揚）させ新しい価値を創出し、社会にその仕組みを広く浸透させよう。目に見えるものを大切にする株式資本主義ではなく、目に見えないものを大切にする公益資本主義の仕組みを考え抜き、地域や社会のために公益を推進しよう。そして、誰一人取り残さない社会を創るために、学んだ公益資本主義を自身の会社で実践することで、我々が率先して目指すべき社会像を具現化していくことが必要である。

【組織に向き合い革新してこその伝統】

青年会議所は会議を行う団体であり、会議を疎かにしサロン化すれば必ずや衰退の一途をたどる。すべての物事を会議で決定することから、会議を重要視する団体である。だが、多くの議論を積み重ねながら物事を決めるため、長時間にわたる会議が行われている現実がある。会議運営の在り方や事業計画書と予算の作成について、今までやっていたから正しいという先入観や思い込みを捨てる勇気をもち、時代に即した組織へと進化しなければならない。効率的な会議運営の在り方に改善し、充実したワークライフバランスを心掛けよう。より良い青年会議所の運動を行うために、会議の時間は会員の貴重な時間を使っていることに感謝し、活発な議論が進められる有意義な時間としよう。また、事業予算について、収益事業や企業の協賛金、クラウドファンディングの活用も模索したい。組織のコンプライアンスの意識を高め、ガバナンスの強化を図っていくことも重要である。

【組織力の強化のために進化と深化する組織へ】

自分自身にプライドをもたなければ、自分が所属する組織に自信と誇りをもつことはできない。会員拡大ができないのは、青年会議所運動が理解されていないのではなく、その運動を推進している我々自身が、自分のプライドに確信がもてないからである。自分自身の生き方にプライドをもち、説得力を示すことで、入会候補者に青年会議所の魅力を語ることができる人財となろう。そして、仮入会制度を含めた新制度を構築し、会員拡大を運動として展開していく。閉鎖的で限られた空間だけで運営されるサロン化した組織にならないためにも、今まで津山青年会議所の存在を知らなかった方々へ積極的にアプローチし、運動発信に力を入れていきたい。我々の運動に共感して協力してくれるスポンサー・サポーターの拡大を進めることで、質の高い運動をつくることが期待できる。また、既存の運動や事業が、ビジョンと沿わない場合は、整理することも検討しなければならない。

【自分自身に真摯に向き合うＪＡＹＣＥＥプライドの実践】

価値ある人生、青年である大切な期間に、互いを高め合う修練の場が青年会議所である。役職よりもその時間をどのように向き合うかに価値を見出す団体であり、現役時代に培った経験を４０歳以降の人生で、遺憾なく社会へ還元することに最も誇るべき価値がある。この時代に謙虚に向き合い、互いを高め合うような団体は他にはない。魅力のある指導者にも魅力のない指導者にも向き合うことは、すべてが成長の糧となる。自らにどのように活かすのかは自分次第であり、組織の魅力を高めることも自分次第である。社会を変えようとするよりも、まずは己を高めることから始めよう。時間を使うということは、命を使うことと同じである。取り返せないこの時間をどのように使うのか。我々の命である時間をどのように使うのかは自分次第である。限りある人生、数ある団体の中で、津山青年会議所を選んだ。その自分の尊い決断に誇りをもとう。それが我々のプライドである。

【独創性や手法にこだわった例会・親睦交流】

青年会議所の集いは目的や効果を明確にした設営をすることで学びの場となる。トレーニングの場であると同時に、一期一会の交流の場でもある。だが、これらの交流の場は、互いの時間と労力と金銭を使うことで成り立つものである。だからこそ、我々はその大切な時間を疎かにしてはならない。活きた場にするには、克己復礼の精神をもち、互いに礼を尽くそう。おもてなしは、表裏なし、つまり、表裏の無い心

でお客様をお迎えすることである。出会う前から相手のことを考え、時間と労力を費やしながらも、その気遣いを感じさせることなく相手を感動させる。ここに、おもてなしの心があるのだろう。そして、招く側のみが一方的にもてなすのではなく、招かれる側も相手の気持ちを汲み取り、感謝を伝える。互いが協力して一体となって素晴らしい空間を作り上げていく。主客が一体となり互いに心地よい時間を過ごすことができる交流は、より強くかけがえのない時間となるに違いない。

【真の青年経済人としての新たなる挑戦へ】

価値観が多様化し、さらに激しい変化が起き続ける未来においても、我々はイノベーションを起こすとともに、新たな価値を創造できる強い組織を作り、地域のリーダーとしての手腕を発揮していかなくてはならない。そのために、多様な人財の力を結集し、新たな価値を創出しよう。我々が絶えず多様な個性と関わり、議論を交わすことを積み重ねて、組織を前へ進めていくことがダイバーシティマネジメント推進の第一歩であると考える。また、経済的価値に留まらない多様な価値が包摂され、多様な個性が多面的能力をフルに発揮しながら日本の特徴をうまく活用し、様々な新しい価値を作って発信し、世界から共感されリスペクトされることが価値デザイン社会である。価値デザイン社会に関する調査研究を行い、新しい価値を創出するためのデザイン的な思考を身につけよう。我々は、郷土つやまの経済を牽引する真の青年経済人として、常に学ぶ責任と覚悟が必要である。

【持続可能なまちづくりとシビックプライドの醸成】

我々が暮らす郷土つやまは、車社会の到来、郊外への大型店舗の立地により、中心市街地においては活性化に向けた取り組みが進む一方で、居住人口の減少とともに、商店街には空き店舗が目立つ状況となり、衰退が顕著となっている。コンビニエンスストアや大型量販店の増加をはじめとした環境の変化や消費者ニーズの多様化により、今後益々厳しい状況となることが予想され、中心市街地では、活力のあるまちづくりを進めるためにも、都市機能を集積し、城下町の風情が色濃く残る郷土つやまの中心市街地の特徴を活かし、市民活力を活かした賑わいのあるまちづくりを進めることが必要である。城下町を基礎としたコンパクトシティを未来のまちづくりのビジョンとして設定し、戦略的なサスティナビリティの視点から地域活性化に取り組み、持続可能なまちづくりとシビックプライドの醸成を推進しよう。我々が、愛する郷土つやまの未来のために奮起しなければならない。

【地域が稼ぐ広域観光と地域ブランド戦略】

郷土つやまのまちづくりの礎となった津山城を中心として、かつての城下町の風情を色濃く残し、歴史的文化財産、鉄道近代化産業遺産、豊かな自然に囲まれた桜の名所など、魅力ある観光資源を有している。だが、観光客の多くが、僅かな滞在時間で市外の目的地に向かう通過型観光地の現状にあることから、情報発信力の強化を図るとともに、市内の回遊性を促進し、滞在時間を増やす取り組みが必要だろう。また、インバウンドの促進は、地域活性化において欠かすことができない重要な観点である。そのため、季節ごとの魅力づくりなど観光資源のブラッシュアップや、外国人を含めた受入環境の整備を進め、関係団体・機関と連携して広域観光に取り組むことが必要である。枠を超えた広域経済圏の確立に向けて、時代に即した知名度向上を図るシティプロモーションを積極的に推進しながら、愛する郷土つやまの未来のために、青年として新しいビジョンを描いていこう。

【防災・減災、環境、国土強靭化の推進に向けて】

西日本豪雨では、時間雨量が１００ｍｍにも達する激しい雨が各地で長時間続いた。近年、雨の降り方が集中化・局地化するなど、地球温暖化に伴う気候変動により気象災害の激甚化が懸念されている。深刻なのは、気象災害に関する従来の概念や常識が通用しなくなったことである。人々の生命と財産を守るため、今後は、災害被害を最小化し、被害の迅速な回復を図る減災に向けた取り組みが重要である。市民一人ひとりの防災意識を高め、協力し相互に支え合う、自助・共助の意識に基づいた地域防災力の強化が求められている。その時になって慌てるのではなく、今までの災害支援活動を検証し、津山青年会議所の特性を活かした運動を行い、地域から頼られる存在であることを証明しよう。また、豊かな環境を次世代に残すために、持続可能な自然環境の保全や分散型エネルギーの活用が求められている。豊かな自然環境の保全と快適に暮らせるまちづくりを進めよう。

【逞しく生きる力を育むための青少年健全育成】

子供たちを取り巻く環境は、生活体験の不足、人間関係の希薄化や規範意識の低下、人や命の尊厳に対する感性の欠如、犯罪の低年齢化、ＳＮＳなどのメディアを使ったいじめ、ひきこもり、不登校、ネットトラブルなど、多様化・複雑化しており、深刻な社会問題となっている。未来を担う子供たちが、これからの社会の中で、逞しく生き抜くためには、自らの課題を見つけ、考え、学び、主体的に判断し行動する力が必要であり、自己を認め、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性をもち、人とつながることができる力を醸成しなければならない。子供たちが、郷土つやまに誇りと愛着をもち、心豊かに逞しく未来を切り拓いていく人財となるために、責任世代である我々が、子供を支えていくことを自覚し、青少年健全育成運動を津山青年会議所のブランド事業として確立しよう。我々の責任は、志と使命感へと昇華し、未来を生きる子供たちの推進力となろう。

【郷土つやまを牽引するグローバルリーダーの育成】

グローバル市場が急速に拡大しているが、日本人の内向き志向が指摘され、グローバル化への対応が遅れている。青年経済人の資質として、グローバルな視野をもつことが求められ、広い視野をもったグロー

バルな人財の育成は急務である。新たな価値を創る想像力、更には国際社会で自らの考えを積極的に発信する能力を養うことは重要である。日本人は古来より相手を慮り調和する「を以てしと為す」の精神を大切に受け継いでいる。和の心から日本人の精神性について掘り下げることで、次世代に受け継いでいくべき日本人のアイデンティティについての理解を深め、国際社会の一員としてのアイデンティティをもつための運動を推進しよう。我々は、青少年の人財育成と国際交流を通じて、豊かな国際感覚をもった世界に貢献できる人財となり、世界最大級の規模をもつＪＣＩのネットワークを活かした幅広い分野での市民同士の交流や地域間交流をプロモートしよう。

【子供たちの夢であるスポーツで郷土つやまの創生】

東京２０２０オリンピック・パラリンピック競技大会の開催は、これまで以上にスポーツが身近な存在になるだろう。未来を担う子供たちにとってのスポーツは、生涯にわたって逞しく生きるための健康や体力の基礎を育むとともに、公正さと規律を尊ぶ姿勢や克己心を養うなど人間形成に重要な役割を果たすものである。経済の発展で生活様式が変化するなど、子供のスポーツや外遊びの重要性を軽視する傾向が進み、体を動かす機会が減少している。子供が積極的に運動や遊びを通じて、スポーツに親しむ習慣や意欲を育み、体力の向上を図ることが課題となっている。若年層からスポーツ活動の啓発に努めるとともに、スポーツと産業・観光との連携を図り、交流人口を増加促進させることで、コミュニティが活性化し、魅力ある郷土つやまの発展を目指そう。また、子供たちの豊かな感性の醸成や育成、若者の芸術・文化に触れる機会の創出や伝統文化の継承も課題である。

【自らのプライドをかけた会員拡大への挑戦】

我々は、青年会議所運動に可能性や価値を感じて、津山青年会議所という団体に自信と誇りをもっている。だが、会員減少が止まらない。政治や行政に主体的に参画し、責任ある発言ができる我々青年の存在が失われてしまえば、郷土つやまの未来はどうなるのだろうか。青年経済人らしく、具体的な数値目標を掲げ、津山青年会議所のプライドをかけて、会員拡大することをここに誓う。時代が大きく変化する中、会員を受け入れる組織体制も変化しなければならない。変わらないために変わる。守るべきものがあるからこそ、愛する郷土つやまがあるからこそ、本気で変わらなければならない。青年に成長の機会を提供し、社会で活躍できる人財を輩出する団体で在り続けるためにも、企業、女性、２０代会員の共感を得られる、柔軟な組織変革を実現しよう。我々はこの逆境を、時代に即した団体へと変革できる絶好の機会であると受け止めよう。取り戻そう、我々の矜持を。

【地域にインパクトを与え時代に必要とされる組織へ】

津山青年会議所は、“明るい豊かな社会”の実現に向けて、地域の問題解決や様々な運動を続けているが、まだまだ世間からの認知度は低く、効率的に運動を発信できていないのが現状だろう。ＳＮＳやブログ、ＷＥＢサイト、アプリなど発信できるツールは揃ってはいるが、戦略的に使いこなせてはおらず、もっと広く社会に発信することが今後の課題となっている。我々の運動を多くの人に発信するには、これまでの広報戦略を検証し、タイムリーに運動を発信し、より効果的な広報とブランディング計画を立案しよう。さらに、組織の認知度や存在価値を高めるために、新時代に即したブランディングに取り組む必要がある。イメージや認知度といったものは受け取る相手が判断するものであり、受け取る相手の琴線に触れる活きた情報を届ける広報戦略の構築が必要不可欠である。叡智を集結して地域にインパクトを与え、郷土つやまに絶対的に必要とされる組織となろう。

【社会人として信頼に足る指導力をもった人財育成】

若き指導者を育てる指導力開発は、時代の変化とともに、指導力開発から人間力開発へと深化してきた。津山青年会議所は、指導力開発という理念を大切にし、互いに叱咤激励を繰り返しながら、真のリーダーの育成に勤しんでいる。我々は、自ら納める会費に基づき運動を行い、自らの指導力に還元している。金銭の授受のない関係の中で、相手を納得させる。そこには強制ではない、信頼や人間関係という無形の情によってのみ達成されるものがある。人は人によって磨かれる。人を磨くには同じ人でなければならない。毎年組織を改編するのは、様々な立ち位置に会員を置き換え、幅広いトレーニングに結びつくよう工夫された制度であり、多くの経験を重ねながら、指導力を養っている。我々は、今日の犠牲を払うことを厭わず、常に進歩への挑戦を行う青年指導者である。人生最後の学び舎で、多くの意識変革の機会とかけがえのない生涯の仲間に出会えることに感謝しよう。

【むすびに】

１０年後の未来を想像しよう。２０３０年の主役は今の子供たち。

「悲しみと苦痛は、やがて人のために尽くす心という美しい花を咲かせる土壌だと考えよう。心を優しくもち、耐え抜くことを学ぼう。強い心で生きるために。」

これからの未来を生きる子供たちには、待っているだろう過酷な不条理が渦巻く世の中で、強いだけではなく、優しさという本当の強さの意味を伝えたい。人は強くなくては生きていけない。本当の強さとは、苦労や困難、失敗や敗北、挫折や喪失を乗り越え、それにより真の優しさを手に入れたものだけが得られる強さである。強さというのは、頑丈な強さではない。優しくて柔和な、そして強靭であることが本当の優しさであり真の強さである。真の強さと優しさは、いつも共に在るもの。自分以上に自分を超えて、至誠で相手のことを思いやる心。これからも、出会った人すべてに、誠を尽くそう。新たなる旅立ちに、至

誠を貫き、歩みを刻んでいきたい。それが今までお世話になった先輩への感謝であり、同志への誠意になると信じて。

誰かのために、強い心で行動するとき、自分のもつ最大限の力が発揮できる。

この時代に、このまちに、生きた証を残そう。
大切な人たちを守るために、この命を使って、郷土つやまをより良くしよう。
そして、大切な人たちに、これから生まれてくるまだ見ぬ命に語ろう。
「僕らが、このまちの未来を変えた。僕らが、愛溢れる郷土つやまを創った。」と。

僕らの挑戦が、未来を変える。

愛溢れる郷土つやまの実現のために。
この命、翔けよう。

新たなる旅立ち

僕らは動き出し、ここから未来が始まる。
愛する郷土つやまの空は、も美しく青く、ここにある。

一般社団法人　津山青年会議所
２０２０年度　基本計画

スローガン

ＳＴＡＲＴＩＮＧ　ＯＶＥＲ

未来へ 命翔ける

基本理念

志高き人財が挑む

愛溢れる郷土つやまの実現

基本方針

- プライドと説得力を伴った会員拡大運動の実践
- 多様な個性が共感を広げる魅力ある人財の育成
- 戦略的な未来志向による持続可能な地域の再興
- 豊かな人間性と和の心が調和した次世代の創造
- 果敢な挑戦と変化が織りなす深化した組織運営

一般社団法人　津山青年会議所
２０２０年度　基本計画

事業計画
［1］津山青年会議所が主催する運動・事業
新年懇親会【1月】
納涼会【8月】
望年会・卒業式【１２月】
新会員研修会【3月】

［2］ＪＣＩ、日本青年会議所が主催し、参加する事業
京都会議【1月】
金沢会議【2月】
ＪＣＩ ＡＳＰＡＣ（カンボジア／アンコール）【6月】
サマーコンファレンス【7月】
全国大会北海道札幌大会【9月】
ＪＣＩ 世界会議（日本／横浜）【１１月】